

## 初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」における コンテンツ共有の試み

——遠隔授業を契機とした取り組みと成果——

西 出 弓 枝・浦 上 萌・安 立 奈 歩  
加 藤 容 子・三 井 悦 子・山 口 雅 史  
増 井 透・三 浦 隆 宏・山 根 一 郎

Trial Practices to Share Contents in “First Year Seminar”, First Year  
Subjects at University: The Efforts and Results During Remote Lectures.

Yumie NISHIDE, Moe URAGAMI, Naho ADACHI, Yoko KATO, Etsuko MII  
Masafumi YAMAGUCHI, Toru MASUI, Takahiro MIURA and Ichiro YAMANE

### 問題と目的

初年次教育として「ファーストイヤーゼミ」「入門演習」など、高校から大学に学びを進めるうえでガイドとなる演習型の授業を設定している大学は少なくない。また、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会が2006（平成18）年度以降「学士課程教育の在り方に関する小委員会」において、学士教育課程の再構築が喫緊の課題であるとの認識に立ち、高等学校から大学への円滑な移行に果たす初年次教育の重要性を指摘したことにより、学士課程教育のなかに初年次教育を明確に位置づけることが提言された（文部科学省，2019『学士課程教育の再構築に向けて』（審議経過報告））。

相山女学園大学では、教養教育科目において初年次教育として1年次前期に必修科目である「ファーストイヤーゼミ」が開講されており、人間関係学部心理学科においては、10クラス開講されている。その目的は、大学生活を始めるにあたって、一クラス十数名という少人数のクラスにおいて演習形式で授業を構成することによって大学における学びにとって必要な知識や技術および態度を習得することである。具体的には、新入生が高校までの学びと大学での学びは異なっていることを確認し、大学での学びに主体的かつ積極的に取り組めるよう、さまざまな学びの方法や技術および態度などを学修する。また、小集団での自由な討論を通して、問題を明確化したり新しい課題を見つけたりしていくような学びの方法の基礎を身につけることが期待されている。人間関係学部における初年次教育科目である「ファーストイヤーゼミ」の授業は、現在のシラバス、内容になるまでに以下のような変遷をたどってきた。

---

\* 人間関係学部 心理学科

2007（平成15）年に臨床心理学科が心理学科に名称変更されることに伴って人間関係学部でカリキュラムが改変された。この時期に心理学科の専門科目であった「入門演習」が、教養教育科目に位置づけられることになった。当時のシラバスでは、「大学での学習方法・学習態度を学ぶ」という授業内容で、授業計画については授業回数に対応した内容が記載されていなかった。「大学でいかに学ぶかについて、科目の取り方、文献の探し方、資料のまとめ方、研究発表の方法など、いわゆる大学での学習方法・学習態度を学ぶ。一方向的な講義ではなく、担当教員と、あるいは受講生間で個人的にふれあう最初の機会であることから、具体的な人間関係のあり方を体験することにもなる」と記載されており、具体的な授業に対応した授業計画は、担当教員の裁量によるところが現在以上に大きいものであった。1年次前期に必修の演習科目として少人数の形態で開講されるという点では、初年次教育科目としての位置づけは変わらず、大学の学びの出発点として当初から重視されていた科目である。そして、2010（平成22）年よりシラバスがWebでも公開されるようになり、2011（平成23）年から、「入門演習」においても教務委員会や学科会議で検討が行われた上で、15回の授業回数に対応したシラバスが作成されるようになった。そこでは、「大学における学びにとって必要な知識や技術および態度を習得する」という到達目標を達成するために、「高校までの学びと大学での学びは異なっていることを確認し、大学での学びに主体的かつ積極的に取り組めるよう、さまざまな学びの方法や技術および態度などを学ぶ。また、小集団での自由な討論を通して、問題を明確化したり新しい課題を見つけていくような学びの方法の基礎を身につける」ということが授業の内容に盛り込まれ、15回の授業内容は一部の内容（研究倫理教育）を除いて、現在のシラバスのような形で記載されるようになった。担当教員共通のシラバスであることは当初から変わらないものの、15回の内容が明記されたことにより、具体的に盛り込むべき内容が明確化された。しかしながら、教員の裁量が担保されていたため、教員によって、授業内容にどの程度の相違があるか検討するために、当時の学科主任が調査を行い、2013（平成25）年にはその結果が報告された。そこでは、9名の担当者が「入門演習」の授業において具体的にどのような内容を取り上げ、授業を構成しているかに関する調査が行われ、結果を担当者が参照できるようにされた。調査によって、レジュメの作成、レポート作成、レポート発表、グループによるプレゼンテーションなど、各担当教員がどの内容に注力して授業を構成しているかが明らかになり、FD活動としても興味深い取り組みであった。

その後、2015（平成27）年には、全学的に教養教育科目を共通化する改革に伴い、「入門演習」が「ファーストイヤーゼミ」に改称され、「入門演習」の内容がおおむね引き継がれることになった。そして、2019（平成31・令和元）年より、全学的に授業内容に「研究倫理教育」が含められることとなり、2020（令和2）年より人間関係学部で開講される「ファーストイヤーゼミ」は表1のような授業計画のシラバスとなった。

現在の「ファーストイヤーゼミ」においても、上記のように授業の具体的な内容や構成は教員の裁量に任されている部分が多いため、授業の教材や学生に求める課題はクラスによって異なっている。

ところが、2020年当初から増加傾向にあった国内における新型コロナウイルス感染者数が大幅に増加した影響を受け、全学的に全科目を遠隔授業で実施する方針が4月に決定され、教員はその対応を余儀なくされた。教員は学習管理システム（Learning Management

表1 ファーストイヤーゼミの授業内容

- 
1. ガイダンス・大学でいかに学ぶか
  2. 研究倫理教育
  3. 図書館の利用の仕方、資料の収集方法
  4. 資料の分析方法
  5. レジユメの作成方法
  6. レポートの書き方
  7. コンピテンシーテスト活用ガイダンス
  8. 発表と討論①
  9. 発表と討論②
  10. 発表と討論③
  11. チュートリアルセミナー
  12. 発表と討論④
  13. 発表と討論⑤
  14. 発表と討論⑥
  15. 全体のまとめ
- 

System, 以下, LMSと記す)の運用を学内の遠隔対策チームによる講習会やマニュアルによって学習しつつ, 通常は対面で実施する授業内容をどのように遠隔授業として構成するかを検討し, これまでとは異なる形でコンテンツを作成するなどの対応を迫られた。そのため, 初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」の授業に関して, ①学科教員間でLMSに関する情報共有を行いやすくすること, ②コンテンツを共有することにより, 教員のコンテンツ作成の負担を軽減すること, ③授業のコンテンツを共有することにより, クラスによる学修内容の相違を低減すること(2019年7月実施の学生ヒアリング調査の結果ファーストイヤーゼミのクラス間での差異に関する意見があったため, 授業改善の取り組みとしての意義があることも期待された)を意図し, 担当教員にコンテンツ共有・作成に関する調査を実施した。その結果, 「コンテンツをすべて〜一部共有したい」と回答した担当者が8名, 「わからない」と回答した担当者が1名であった。また, その際に, コンテンツの作成を担当できる項目, コンテンツの作成を希望する項目も調査した。その結果を用いて, 参加可能な担当で2度の「ファーストイヤーゼミコンテンツ共有会議」を開催し, コンテンツ利用に関するおおまかな方針を決定した上で, 表2のようなシラバス修正案を作成した。また, 会議への参加は任意であったため, 会議の記録をGoogle Classroomの「ファーストイヤーゼミコンテンツ共有会議」クラスのフォルダに保存し, 担当者がいつでも参照できるようにした。その結果, 表3のような大枠としての方針が整理された。

そこで, 本研究では, 2020(令和2)年度の4月に新型コロナウイルス感染症対策として大学がすべての科目を遠隔授業とする方針をとったことを契機として実施された, 初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」のコンテンツ共有の試みについて, その取り組みを振り返り, どのような効果があり, どのような点が反省点として残されたのかについて検討することを目的とする。具体的には授業終了後に担当教員により任意に実施された学生および教員を対象とした調査を分析することを通して, 振り返りを行うことにより, 今後の初年次教育科目としての「ファーストイヤーゼミ」の具体的なコンテンツや課題の構成を検討するための材料を提供する。

表2 2020年度における修正シラバス案・授業内容・コンテンツ

修正シラバス	内容	コンテンツ	担当者
1. ガイダンス・大学でいかに学ぶか①	オリエンテーション・遠隔授業の準備・自己紹介・人間関係学部案内・履修登録修正期間②	遠隔授業調査 遠隔授業の受け方	各教員 浦上
2. ガイダンス・大学でいかに学ぶか②	大学での学び・履修の手引き（4年間の学び・モジュール）・入学前教育レポート課題の内容討論	大学での学び	安立
3. ガイダンス・大学でいかに学ぶか③	危機状況下での心理とそれをどうマネジメントするか・現在の困り感や今後の大学生活の見通しなどの共有	不安のマネジメント	加藤
4. 研究倫理教育	履修の手引, 大学における学び（研究）と倫理	研究倫理教育	三浦
5. 図書館の利用の仕方, 資料の蒐集方法	図書館の利用の仕方・資料の蒐集方法	図書館作成	—
6. レジユメの作成方法	ポイントのまとめ方（アウトラインをつかむ）・レジユメの作成方法	レジユメの作成方法	増井
7. レポートの書き方	レポートの書き方（構想・アウトライン・形式・推敲・自身の意見の主張）+原稿用紙の使い方	レポートの書き方	山根
8. 発表と討論①	学生のレポートの発表とフィードバック①	話し言葉と書き言葉	三井
9. 発表と討論②	学生のレポートの発表とフィードバック②		
10. 試験の受け方	遠隔授業における試験の受け方・レポートの提出/平常時の試験の受け方・レポートの提出	試験の受け方	西出
11. 発表プレゼン資料の作り方	発表プレゼン資料の作り方(PPTの作り方・アウトラインの使い方・図や絵の挿入)	発表プレゼン資料の作り方	山口
12. 発表と討論③	学生のPPT発表とフィードバック①		
13. 発表と討論④	学生のPPT発表とフィードバック②		

## 方法

以下に記す2つの質問紙調査を実施した。

### 1. ファーストイヤーゼミに関する授業アンケート

**調査時期**：2020（令和2）年8月（ファーストイヤーゼミ最終回後に実施）

**調査参加者**：ファーストイヤーゼミ受講生 60名

調査は授業担当者の任意により実施されたため、心理学科で開講された10クラスのうち5クラスの受講者が調査参加者となった。有効回答数は55（有効回答率 91.7%）であった。

**調査内容**：2部によって構成された。

- (1) ファーストイヤーゼミで修得することが計画された8つの内容（遠隔授業の受け方、大学での学び・履修の手引きの内容の理解、ストレスや不安のマネジメント、大学における研究倫理、レジユメノ作成、レポートを書く、パワーポイントの作成、発表する）について、「できる」「少しはできる」「あまりできない」「できない」の4件法で自己評価を求めた（表4参照）。

表3 ファーストイヤーゼミコンテンツ共有会議で議論された内容・方針

**【第1回会議：会議で決まった、あるいは議論された方針】**

1. コンテンツの作成は、授業実施日の1週間前までに作成し、共有する。他の方からの追記・修正の依頼などがある場合には、アップされたらすぐ連絡。
2. コンテンツは、基本的にPPTで20～30分程度の内容を作成。
3. 担当教員は、原則として、PPTを各クラスで共有機能を使って提示するにとどめ、学生に配布しない。授業に使うLMSはGoogle Classroom。
4. 事前の遠隔授業調査において、学生がWifi対応があるか、またはスマートフォンの容量が大容量の契約をしているか確認する。もし、クラスのなかに一人でもWifi対応がなく、スマートフォンの契約容量が少ない学生がいた場合には、そのクラスは、PPTのハンドアウトをPDF化したものをダウンロードさせるなどして、対応せざるを得ない。その場合には、双方向型授業の実施が困難となってしまうため、8・9・12・13回の実施は非常に対応が困難とならざるをえない。（←例えば、緊急事態宣言が解除された場合、その学生のみ大学のコンピュータ室を利用することを認められないか？そうでなければ、当該クラスの他の学生たちが相当不利益を被ることになるのではないか？）
5. ファイルフォルダに、各コンテンツ用のボックスを作成。これまで各教員が作成したものをコンテンツ作成担当者が閲覧した上で、作成できるようにする（これまでの各教員の経験知を最大限活用する）。

**【第2回会議：会議で決まった、あるいは議論された方針】**

1. コンテンツの作成は、授業実施日の1週間前までに作成し、共有する。他の方からの追記・修正の依頼などがある場合には、アップされたらすぐ連絡。
2. コンテンツは、基本的にPPTで20～30分程度の内容を作成。
3. 学生への資料配布は原則としてPDFのみとする。
4. 授業は、すべて双方向とするわけではなく、例えば、20分双方向、30分ダウンロードをした資料を読む、あるいは作業をする、終了前に10分程度双方向とするなど、配慮の必要な学生の通信量負担軽減などを考慮する。自身のビデオ通話や音声を切っておくだけでも、1/3～4の通信量の節減となる。
5. 基本的に、当該の授業週の月曜日に公開されるように設定するなど、毎回の授業・課題設定とする。
6. 各自必要な情報を学生と共有し、授業を進める。

(2) 遠隔授業のファーストイヤーゼミの振り返り

授業時間を含めファーストイヤーゼミにあてた時間、わからないことがあった際の対応、リアルタイム双方向型のLMS（Google Meet やZoom）を利用してよかったこと、リアルタイム双方向型のLMS（Google Meet やZoom）を利用して改善すべきことについて、自由記述による回答を求めた。

2. ファーストイヤーゼミコンテンツ共有に関する振り返り調査

調査時期：2020（令和2）年9月下旬

調査参加者：調査は後期授業開始の時期にファーストイヤーゼミ担当者10名に依頼し、任意により実施されたため、7名が調査参加者となった（有効回答率87.5%）。

調査内容：2部によって構成された。

- (1) 受講生を対象とした調査の8つ項目を基本に12の内容（遠隔授業の受け方、大学での学び・履修の手引きの内容の理解、ストレスや不安のマネジメント、大学における研究倫理、レジユメの作成、レポートを書く、パワーポイントの作成、発表する、話し言葉と書き言葉、試験の受け方、図書館の利用の仕方、キャリア教育）について



て、「共有されたコンテンツ・資料をすべてそのまま活用した」「共有されたコンテンツ・資料の一部をそのまま活用した」「共有されたコンテンツ・資料を自身が使いやすいように修正して活用した」「共有されたコンテンツ・資料を参照して、自身の資料を作成した（または、昨年度までの資料を利用した）」「共有されたコンテンツ・資料を利用・参照せず、自身の資料を作成した（または、昨年度までの資料を利用した）」「この内容は実施していない」の6件法で自己評価を求めた(表4参照)。

## (2) 遠隔授業のファーストイヤーゼミの振り返り

ファーストイヤーゼミの準備にあてた時間、わからないことがあった際の対応、リアルタイム双方向型のLMS (Google Meet やZoom) を利用してよかったこと、リアルタイム双方向型のLMS (Google Meet やZoom) を利用して改善すべきこと、小グループ活動の導入状況、対面授業の実施状況、ファーストイヤーゼミにおけるコンテンツ共有について来年度の希望について自由記述による回答を求めた。

## 結果と考察

### 1. ファーストイヤーゼミ終了時におけるスキル獲得に関する受講生の自己評価

まず、受講生が授業・授業準備にあてた時間について図1-1に示した。「1.5時間～3時間程度」が70.9%を占めており、「3～4時間」が16.4%、「4時間以上」が9.1%となっており、レジュメやレポート、パワーポイントによるプレゼンテーションの作成や、資料蒐集、発表練習などに要した時間が相当時間あったことが示唆される。

次に、ファーストイヤーゼミ終了時における各アカデミックスキルの獲得に関する受講生自身の自己評価に関する調査結果を図1-2から図1-9にまとめた。

「遠隔授業の受け方」(図1-2)について、受講生はファーストイヤーゼミだけでなく、前期のさまざまな授業を遠隔授業の形態で受けてきたこともあり、「できる」が87.3%であり、大学の各科目を学ぶより先に学修された内容であることが窺われる。ただし、12.7%の受講生が「少しはできる」と評価しており、課題提出や質問などがまだ十分だと判断できるほどではないという学生も存在する。次に、評価の高かった項目は、「ストレスや不安のマネジメント」(図1-4)であり、69.1%の受講生が「できる」と評価していた。しかし、3.6%の学生は「あまりできない」と評価しており、大学生活という新しい生活に加え、新型コロナウイルス感染症対策としての新しい生活様式への適応を余儀なくされた学生にとっては、交流遠足の中止や遠隔授業による授業の実施により、対面状況で気さ

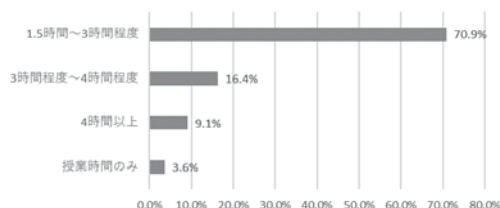


図1-1 受講生が授業準備(予習・復習・課題)にあてた時間

初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」におけるコンテンツ共有の試み

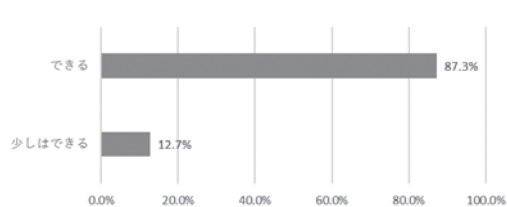


図1-2 ガイダンス：大学でいかに学ぶか  
①遠隔授業の受け方

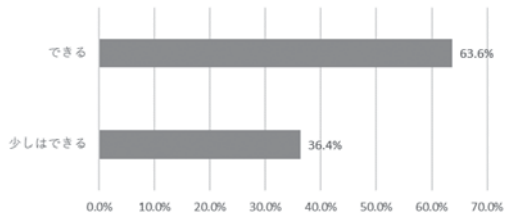


図1-3 ガイダンス：大学でいかに学ぶか  
②大学での学び・履修の手引きの内容の理解

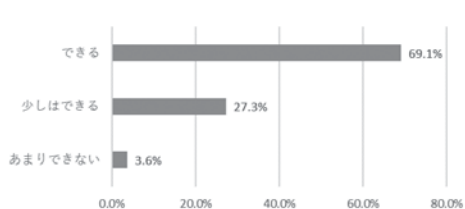


図1-4 ガイダンス：大学でいかに学ぶか  
③ストレスや不安のマネジメント

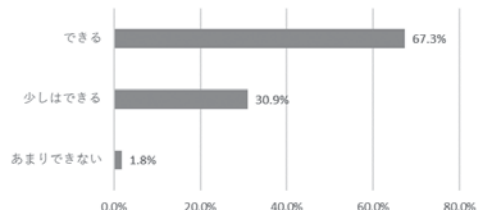


図1-5 研究倫理教育：大学における研究倫理  
(盗用・引用などについての理解)

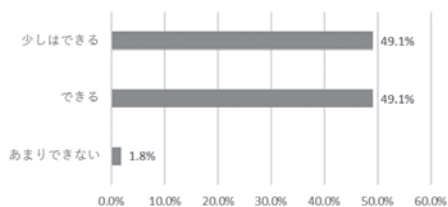


図1-6 レジュームの作成  
(要点のまとめ方についてなど)

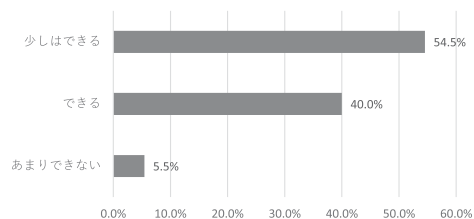


図1-7 レポートを書く  
(構成、書式や使い方について)

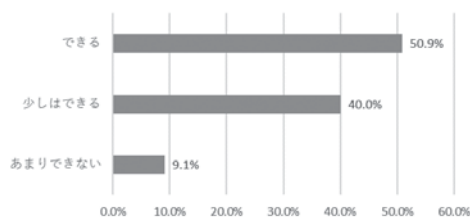


図1-8 パワーポイントの作成  
(構成、デザインの仕方について)

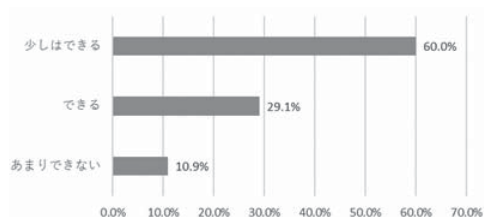


図1-9 発表する  
(原稿の作成、話し方について)

くに日常感じているストレスや不安について語り合う仲間関係を形成しにくかった影響から、困難を生じている可能性が示唆された。第3に評価が高かったのは、「大学でいかに学ぶか・履修の手引きの内容の理解」(図1-3)であり、63.7%の学生が「できる」と評価をしており、「あまりできない」と評価した学生は1.8%であった。

それに対して、最も評価が低かった項目は、「発表する」(図1-9)であり、「できる」が

29.1%、「少しはできる」が60.0%、「あまりできない」が10.9%であった。また、「レポートを書く」(図1-7)は、「できる」が40.0%、「少しはできる」が54.5%、「あまりできない」が5.5%であった。高森(2020)の調査によれば、「小論文の書き方」は約80%の学生が大学入学前に学んだ経験があると評価しているため、学習した経験が全くないわけではないと思われる。しかし、大学での「レポートの書き方」となると、指定される課題の分量も多く、テーマについての資料蒐集に始まり、文献の引用の仕方など高校までに教わった内容では十分に対応しきれない事柄が含まれると考えられ、「少しはできる」「あまりできない」とやや自信のない評価となったことが示唆された。続いて、「レジユメの作成」(図1-6)が「できる」が49.1%、「少しはできる」が49.1%、「あまりできない」が3%であった。「レジユメの作成」も、大学においてはよく求められるスキルであるが、高森(2020)によれば、大学入学前に学んだ経験があると評価している学生は26.7%にとどまっている項目であり、大学入学後に初めて学ぶ学生も少なくないようである。「レジユメの作成」は、「レポートの作成」ほどの課題の分量や難易度が高くないものの、特に個人で1つのレジユメをまとめるという経験があまりない新生にとっては、やや習得に自信のなさが窺われる項目であることが理解された。

ただし、これらの調査結果は、授業担当者がどのようなコンテンツを学生に提示し、あるいは提示しなかったか、また、どのような課題を提示したか、さらに、その課題に対するフィードバックを行ったかどうかということにも影響を受けるため、例えば、「発表する」に関して、ファーストイヤーゼミ内で発表する経験があったのか、授業内でコンテンツを提示され、概説されただけであったのか、というような授業方法・授業内容と関連付けて検討することが求められる。しかしながら、授業者にどのようなコンテンツや課題を提示し、フィードバックを行ったか否かという点については両者を対応して検討できるような調査を行っておらず、今後各担当者が自身の授業内容と対応付けて検討する必要がある。そのため、ここでは、おおむねの傾向を描出し、検討するにとどめておきたい。

初年次教育科目としての「ファーストイヤーゼミ」において、1年生がアカデミックスキルズをどの程度習得できたと感じているのか、人間関係学部心理学科で調査を実施したのは今回が初めての試みである。そのため、これらが「ファーストイヤーゼミ」の効果であるのか、「コンテンツ共有の取り組み」の効果であるのか、いずれの影響を受けているのかを検討することはできない。しかし、自由記述式の回答に記されていたように、遠隔授業になり、Google Classroomにコンテンツが上げられているため、学生が調べたいときにいつでも必要なコンテンツを参照できるという点で、意義があったものと思われる。これについては、これまでの対面授業においても、テキストを活用したり、紙媒体で資料を配布したりしているため、LMSを用いた授業でなくとも同様であると考えられるかもしれない。一方で、学生がレジユメやレポートやプレゼンテーションを作成するのは、PCやタブレット、スマートフォンなどであり、インターネットがつながっていればすぐに接続できる媒体で資料を参照できるメリットは少なくないようである。

## 2. ファーストイヤーゼミコンテンツ共有に関する振り返り調査

ファーストイヤーゼミ授業担当者によるコンテンツ共有に関する振り返り調査の結果を図2-1から12、図3-1から4にまとめた。

その結果、コンテンツをそのまま活用したものが多かった内容は「遠隔授業の受け方」(図



初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」におけるコンテンツ共有の試み

2-1)「ストレスや不安のマネジメント」(図2-3)「パワーポイントの作成」(図2-7)「キャリア教育」(図2-12)であり、5名が「そのまますべて活用」しており、他には、「一部を活用」したり、「内容を修正して活用」したりしていた。これらの内容は、今年度初めて担当教員が担当する内容であったり、2020年以前には担当教員自身がコンテンツを作成してこなかったりした内容であることが事前調査の結果から推測される。

一方、「話し言葉と書き言葉」(図2-9)「発表の仕方」(図2-8)は、「そのまますべて活用」は0名、1名にとどまり、複数名が「一部を活用」したり、「内容を修正して活用」したりしていた。これらの内容は2020年以前から担当者自身がコンテンツや資料を作成しており、それらを担当者自身が学生に提示しやすいように修正して活用するという形態が採用されたことを示唆している。

また、「レジユメの作成」(図2-5)「レポートの書き方」(図2-6)に関しては、多くの担当教員が2020年以前からコンテンツや資料を作成しており、「共有されたコンテンツ・資料を参照して、自身の資料を作成した(または、昨年度までの資料を利用した)」担当者が、それぞれ2名、1名存在し、「共有されたコンテンツ・資料を自身が使いやすいよう

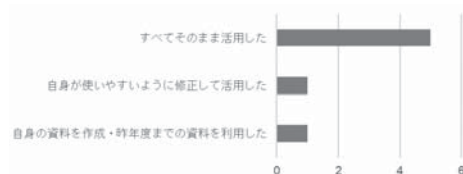


図2-1 ガイダンス：大学でいかに学ぶか  
①遠隔授業の受け方

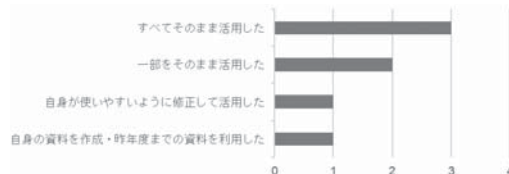


図2-2 ガイダンス：大学でいかに学ぶか  
②大学での学び・履修の手引きの内容の理解

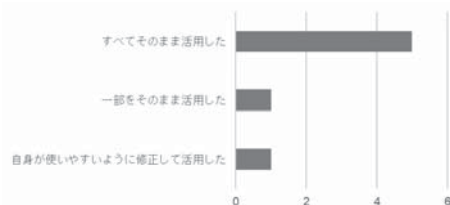


図2-3 ガイダンス：大学でいかに学ぶか  
③ストレスや不安のマネジメント

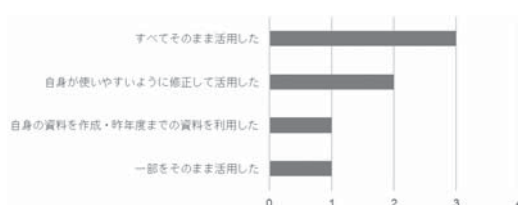


図2-4 大学における研究倫理  
(盗用・引用などについての理解)

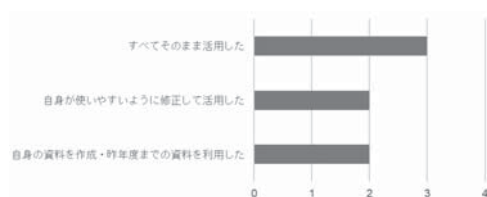


図2-5 レジユメの悪成  
(要点のまとめ方についてなど)

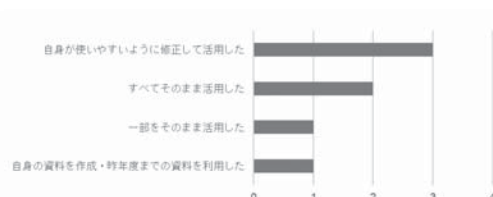


図2-6 レポートの書き方  
(構成、書式や使い方について)

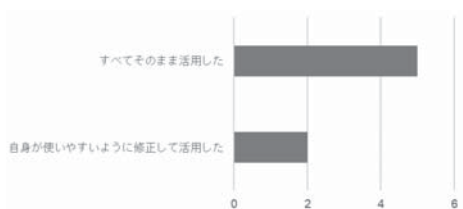


図2-7 パワーポイントの作成  
(構成, デザインの仕方について)

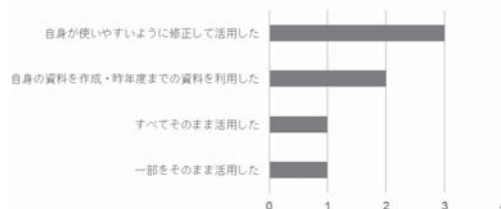


図2-8 発表の仕方  
(原稿の作成・話し方)



図2-9 話し言葉と書き言葉

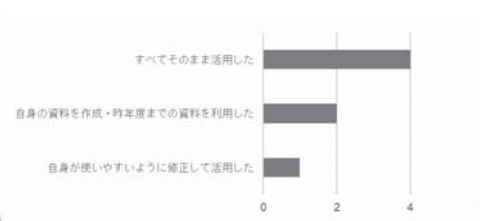


図2-10 試験の受け方

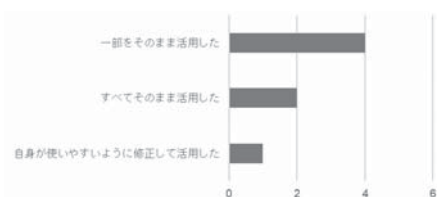


図2-11 図書館の利用の仕方

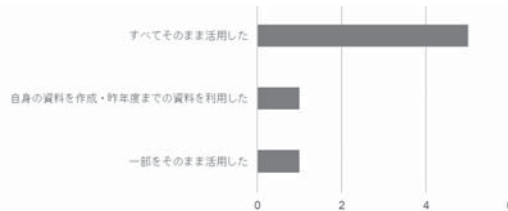


図2-12 キャリア教育

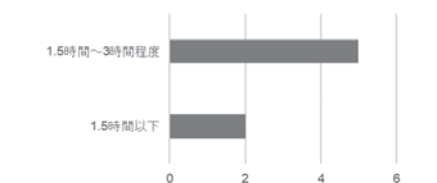


図3-1 毎回の授業準備にあてた時間

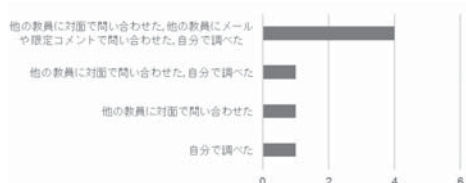


図3-2 わからないことがあったときの対応

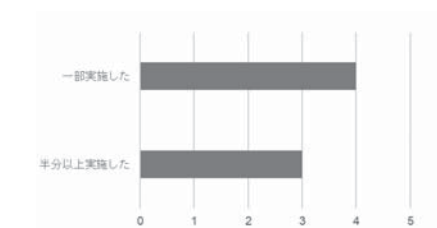


図3-3 小グループ活動の実施状況

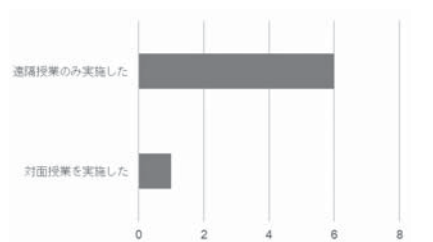


図3-4 大学の方針変更後の授業形態

に修正して活用した」担当者も2名、3名と複数名存在していた。また、「レジュメの作成」「レポートの書き方」に関しては、担当教員の専門が幅広く、必ずしも心理学に限定されていないため、コンテンツや課題例に挙げられた内容は担当者が教えやすい内容でなかった可能性もあることが示唆された。

次に、「遠隔授業におけるコンテンツを活用したファーストイヤーゼミ担当に関する意見・反省点」を表4にまとめた。コンテンツを共有することにより、学生への情報提供・指導が可能になったことをポジティブに受け止められていることが窺われ、必ずしも共有しない場合においても教材作成の工夫等を学ぶことができることが示唆された。また、教材・その他の情報を共有する場が設定されたことにより、慣れない遠隔授業においても学生に一定の質を保った初年次教育の授業を提供することができたことという意義も見出された。さらに、Google ClassroomのLMSを活用することにより、学生への課題の提示が一元的になったことにより、提出物の管理がしやすくなったことに加え、提出された課題を学生と共有することも可能になったことはLMS活用の利点であることが示唆された。ファーストイヤーゼミは演習授業であることから、教員と学生、または、学生同士の交流をどのように保障するかという点については、授業開始初期において小グループ活動に関する情報を共有したため、多くの担当者が小グループ活動を効果的に活用でき、これにより、交流の場を確保することにつながったものと考えられた。また、この取り組みは教室が一つしかない対面授業では実施しにくい方法であり、LMSを活用した遠隔授業ならではの取り組みであることも窺われた。

反省点としては、学生のインターネット環境への配慮の必要性があること、カメラをオンにして参加を求めると自宅環境が映し出されてしまうため、プライバシー保護への配慮が必要になること、大学生活（あるいは、遠隔授業）に対する適応が困難な学生への対応を検討する必要があることが挙げられ、これらは今後の検討課題とされた。

今後の課題としては、時間的な余裕をもってコンテンツを作成・共有することの他に、作成されたコンテンツに対するフィードバックを設けることが挙げられ、今後の教材・授業改善のためにさらに検討することが必要であることが認識された。

## まとめ

以上のように、初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」における受講生のアカデミックスキルの習得に関する自己評価と、担当者による「ファーストイヤーゼミコンテンツ共有に関する振り返り調査」の結果を概観することにより、初年次教育科目としての「ファーストイヤーゼミ」の内容について検討を試みた。

学生においては、おおむね取り上げられたアカデミックスキルが習得されたという評価につながっており、これまでの授業での成果と比較検討することはできないが、一定の成果を上げたことが理解される。ただし、「発表の仕方」「レポートの書き方」「レジュメの作成」については、担当教員が具体的にどのような方法で実施したのかという点を吟味する必要がある。また、これらのスキルは、ファーストイヤーゼミにおける1回の発表、1回のレジュメ作成、1本のレポート作成で達成できるスキルではないため、おおむね「できる」と満足してしまうより、1年次前期においては「少しできる」という評価が妥当な

表4 遠隔授業におけるコンテンツを活用したファーストイヤーゼミ担当に関する意見・反省点

☆Google Classroom, Google Meet, Zoomを使用したファーストイヤーゼミを実施してよかったこと

- ・学生に整った形で資料を提供することができ、学生が何度でも必要な授業を開いて確認することができたこと。
- ・顔を突き合わせて実施することはできなかったが、Breakoutroom的に少人数グループを作成し、学生の仲間関係や情報共有を促進することができたこと。
- ・同時双方向で顔を見て進めることができた。また、小グループ(3人)に分けることもできたので、学生は距離感を縮めることができたようである。
- ・Meetで受講生と双方向のやりとりができ、コミュニケーションが図れたこと。他の担当者と情報を共有することによって、学生に対して一定の質を保った授業を提供できたこと。
- ・Google Meetを使用できない学生がいたのでZoomを使用しました。ブレイクアウトルームを使用し、少人数で話したり顔を出して議論する時間を設けて、対面と同じように学生同士で話をする時間を作れたことは良かった。
- ・課題提出はClassroomを使用した方が、提出物管理等は対面で紙を使用して行うよりも、整理しやすかった。
- ・教員同士で教材や困り事を共有する場(classroom)があったことは助かった。自分にはなかった発想や、教材の作成の工夫等を学ぶことができた。
- ・小グループ活動は、完全に閉じた空間になるためか、対面でやらせるよりも話し合いが活発になったようだ。
- ・提出物がデータで共有できたことでレポートの描き方の指導がしやすかった。
- ・双方向でブレイクアウトルームを使って実施できたことで、ブレイクアウトルームのほうが巡回する教員に質問しやすいようであった。また、ブレイクアウトルームを用いたことで、遠隔であっても学生同士の交流が深まった。
- ・コンテンツを共有したことで、例年よりも密度の濃い情報提供・指導が可能になり、レポートの質が上がった部分があると思う。

☆Google Classroom, Google Meet, Zoomを使用したファーストイヤーゼミを実施して、改善すべきこと

- ・学生に与える課題量の調整
- ・学生に重点的に伝えたいポイントを絞って伝達し、スキルの習得を促す時間を取る
- ・画面共有などのスムーズさ。
- ・意見を自由にいう時間を設けると、どうしても声をあげにくいので、質問者を指名するなどしないと、対面以上に発言が少なくなった。
- ・学生側のネット環境の差が問題となり、たとえば小グループにスムーズに参加できない場合があった。ネット環境を一定水準に整える援助をもっと積極的にしてほしい。
- ・大学への適応が苦手な学生をサポートすることが難しかった。Meetで相談に乗っても十分に対応できなかった。
- ・授業内容に集中してレポート作成の質は高められる反面、対面でおしゃべりしながら緩やかにつながら教育できる場の生成は難しい構造だと思った。しゃべりながらのほうがはかどる学生にとっては厳しい環境だったように思う。
- ・通信環境・プライバシーの観点からビデオオンは強制しなかったが、最終回に雑談の時間を可能な限りビデオオンでするように求めた際、ステテコ姿で上半身着想なしのお父さまが何度も行き来される場面があり、学生が笑いながらではあるが何度も制止していた(強制はしなかったのですがその後ビデオオフで参加していた)。プライバシーに配慮しながら顔をみて話す構造は難しいと思った。

☆ファーストイヤーゼミにおけるコンテンツ共有に関する意見・改善点

- ・これまで他の先生がどのようにファーストイヤーゼミの資料を作成したり、授業をどのように進めているか情報共有することは少なかったが、それを知る機会ができたことは初年次教育のFDとしても意義があったと思う。
- ・資料の作成は1週間前と決められていたが、他の遠隔授業の資料作りにも追われ、自分自身の担当部分の資料の提示が間際になってしまったこと。
- ・担当教員が教師と生徒に分かれ、生徒側になった教員はコンテンツ共有に制限があったようだ。たとえば、前半のうちはコンテンツを共有できたが、後半になるにつれの共有がスムーズにできなくなった。
- ・自分自身で作成した資料を中心にしつつも、他の方のコンテンツを利用したり参照したりさせていただくととても助かりました。自身の発想とは違う意見やコンテンツの展開の仕方が興味深く勉強になりました。
- ・自分が提供したコンテンツを他の教員が使用したフィードバックが設けられると感触がわかってよかったと思う。
- ・教員側も急な遠隔授業を求められ、自転車操業であったが、時間に余裕をもって共有できると、もっと授業内容を練ることができたと思う。

## 初年次教育科目「ファーストイヤーゼミ」におけるコンテンツ共有の試み

評価である可能性もあるのか、さらに検討をすることが必要になろう。

そして、教員間でのファーストイヤーゼミにおけるコンテンツの共有の取り組みに関しては一定の意義が認められた一方で、学生のインターネット環境やプライバシー、大学生活における適応などへの配慮について検討する必要性が認識され、また、教材・コンテンツに関するフィードバックを設けるなど、さらに授業改善の余地があることが示唆された。

### 引用文献

- 文部科学省, 2019『学士課程教育の再構築に向けて』（審議経過報告）中央教育審議会大学分科会 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/018/gijiroku/08022508/002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/018/gijiroku/08022508/002.htm)（令和2年9月1日取得）
- 高森智嗣 2020 福島大学における初年次教育に関する一考察 —アカデミック・スキルズを中心に— 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要, 17-23.